

## 一 アブ

この物語は、大野慎子がどのような経過をたどってアメリカのディビジョンで活躍するようになったのかということと、「風」と言われた山梨インターハイの鶴鳴モーシオンオフェンスが、如何にしてできあがっていったかということを読者に知ってもらうために書いている。前章では前借り七人組の交渉が始まってから永田への挑戦が失敗に終わるまで、試合結果報告を中心に、鶴鳴モーシオンオフェンスがどうして誕生したかということを書いてきた。

ここで少し話の矛先を変え、個々の選手に目を向けてみたいと思う。それは、寺平のアウトサイドシューターをヒントにして生まれた鶴鳴モーシオンオフェンスが、どのように発展していったかということを知るには、この時期の選手たちの中で、どの選手が頭角を現し、どの選手が伸び悩んだかということを知ってもらうのが非常に重要だからである。個人のプロフィールについては、その選手が入学してから「永田への挑戦」が失敗に終わるまでの間の内容とし、それも、おおまかなことだけにとどめておく。なお、慎子のことについては次の「モップ係」の項で詳しく述べるのでここでは触れない。

## 工藤洋子

妹の雅子獲得の経緯で話したように、遠距離県外志願者第一号である。一九九一年のインターハイで優勝した後リクルートがうまくいかず、再び低迷期を迎えなければならなくなったことを、彼女は承認の上で鶴鳴を志願してくれた。それから二年連続、「工藤さんに続け！」と茨城や千葉から志願者が出た。このようなことが起きなかつたら、鶴鳴バスケットはおそらく歴史の片隅に埋もれていつしか忘れられてしまっていただろう。彼女にはAMBIITIONのAとBをとってアブというニックネームを付けた。

彼女は一年生の時からスターティングメンバーで出場している。武器はスリーポイントシュートだ。よく入る。しかし瞬発力がなく、全国のトップレベルの相手になるとピタリマークされて苦しい。訓練すれば改善される筋肉の質ではないのでその課題は解決できないままの三年間だった。しかし彼女は、寺平とともに長崎県代表の国体選手として選ばれ、愛知国体の主力選手として活躍した。

## 櫻田綾香

入学後間もなく疲労骨折で出遅れた。右足が回復したと思ったら左足が疲労骨折になり、結局本格的にプレイを始めたのは二学期からだ。だから復帰当初はディフェンスがまったくダメで一人だけ浮いていた。しかし彼女のプレイを見る目はチーム随一であり、工藤洋子の力を引き出すためにはなくてはならない存在になっていった。入学当初の工藤雅子に「ペアさん（櫻田のニックネーム）のプレイを見ていれば山崎先生のバスケットがわかる。私はペアさんから目を離さない」と言わせた選手である。ただ、プレイが見え過ぎるからアシストに魅力を感じるのか、シュートに積極的になれないのが気になる選手だった。

ところで、櫻田は疲労骨折で約半年も遅れてしまったが女子選手の疲労骨折について述べておこう。櫻田は佐世保出身で自宅通学ができないから寮に入った。寮生活を始めると生理不順になる選手が多い。タイプはまちまちだが櫻田の場合は入学後一年くらいまったくストップしてしまった。実は生理不順は

疲労骨折に重要な関わりを持っているのである。

骨粗鬆症という病気がある。あれは閉経後の女性に多い。それは、骨密度と女性ホルモンが深い関係にあるからである。女性は高齢になると女性ホルモンの分泌が少なくなる。すると、それまで女性ホルモンの睨みを利かされておとなくしていたサイトカインという物質が元気を回復し、骨にいたずらをしてカルシウムの生成を妨げる。その結果、骨はもろくなって傷つきやすくなる。それが骨粗鬆症である。女性ホルモンの分泌が少なくなるのは高齢者とは限らない。若くてもそれは起こりうる。犯人はストレスである。寮に入った選手は生活環境が急激に変わる。そのためのストレスで女性ホルモンのバランスを崩して生理不順になる。それが疲労骨折の重要な要因なのである。

#### 野添真優美

スリーポイントシュートをよく打つ。が、確率はよくない。足は速い。そして頑丈である。最初はそれがいつかは開花するだろうと思つて少々のミスには目をつぶつて使い続けていた。しかし、入学後一年以上経つても感情が優先してしまう彼女の性格はなかなか改善されない。彼女は敵も味方も「まさか！」と思うような場面でスリーポイントを決めたりスティールをしたりする。しかし、大事な場面で「まさか！」と思うようなシュートを落とし、「まさか！」と思うような失敗をする。

それがもつとも特徴的に現れたのが、平成六年の九州高校総体での小林高校戦であった。後半、勝負所のきわどいプレイで、鶴鳴にチャンスが三回おとずれた。三回のプレイに彼女はすべて絡んだ。そして、アシストパスをミスし、ゴール下のシュートを二回落とした。おそらく、本人も「これで相手を捕まえた！」と感じたはずである。その気負いがそういう結果を導いたのであろう。

彼女の場合、場面理解を深める学習を積み重ねればそれが片付くかということそんなに単純な問題ではない。理性と情動の問題だから本人が自己の内面を深く見つめ、自己を改革する努力を積み重ねなければどうにもならない問題である。それがどのような展開を見せるのか、見当がつかないまま一年半の月日が流れていた。ただ、そのような危険性はあるものの当時のメンバー構成上彼女が試合から外されたことはなかった。それが彼女にとっては救いであった。

#### 武藤陽子

新チームになってからは工藤洋子・寺平・櫻田・野添・武藤が不動のスタメンだった。武藤の技術は巧かった。しかし身体が小さかった。それに加えてスピードがなかった。だから二年生になると後輩の工藤雅子にスタメンの座を奪われた。普通、監督の立場からすれば武藤のような選手即ち、プレイがよく見える、勝負の駆け引きができる、技術が多彩である、というような選手がバックアップで控えてくれているチームは心強い。もちろん、パワーがあれば彼女をスタメンとして考えるのだが、パワーが足りないから私は武藤に、野球で言えば重要な中継ぎ投手の役目を期待した。

しかし頑固な彼女は、昨年はスタメンだったというプライドがあるから、それをコート上で顕示しようとする。それが自分を行き詰まらせる結果になるし、味方の足も引つ張るといふ悪循環になって繰り返される状態が続き、ますます彼女は泥沼にはまりこんでいった。雅子が入つて来たから追い越されたのではなく、武藤の身体的な素質では全国大会のトップレベルで主役を担うのは最初から無理だったのである。バックアップとしてならその存在はがぜん光ってくるのだ。

でも、わざわざ遠い茨城から大きな希望を持って鶴鳴を志願してきた選手に「スタメンでやるのはおまえにとって荷が重すぎるよ」と言い切る勇気が私にはなかった。だから、試合の相手を見て時々スタメンで出す。難しい試合でも必ずコートに出るチャンスを作る。野添と違った意味で、私は武藤に気を

配りながらずっと使い続けていた。

工藤雅子

唯一の弱点はスピードがないことである。姉の洋子もそうだった。でも武藤や洋子よりも短距離も長距離も速かったので、それが致命的な欠陥になることだけは避けられた。最初から安心して見ていられるブレイはシューートの安定性であった。数は多く打たない。が、打つべき時に打つシュートはジャンプシュートもスリーポイントも確率が高かった。

しかし、どんな技術よりも頼りになるのが彼女のまじめさと賢さであった。彼女は鶴鳴でもう一度バスケットのイロハから習おうというはつきりとした自分の目標を持って鶴鳴を志願した。その鶴鳴バスケットを少しでも早く習得する方法として彼女は、コートでもっとも鶴鳴バスケットを表現している選手は誰かということに注目した。彼女は櫻田綾香に目を付けた。それを、入学後間もなく故郷の両親に「私は当分ペアさんから目を離さない。それが山崎先生のバスケットを理解する一番の近道だから」と伝えている。

「あの人巧いなあ。よし、しばらくあの人のマネをしてみよう」ぐらいのことは、少し賢い選手なら誰でも思いつく。だが雅子の場合はそんな軽いものではない。櫻田のブレイはもちろんのこと、ちよつとした目配りや立ち話などあらゆる行動に目を付け、櫻田の頭の中に今どんなことがあるのかまでを探ろうとした。彼女の目は常にそうだった。普通に見えているもつひとつ奥まで見ようとしていた。彼女はやがて、「鶴鳴にはコーチが二人いる」と言われる選手になる。当然入学当初からスタメンである。

浜本左也香

新入生では雅子の次に期待した選手である。一七五センチ。長身ながら目がいい。できたら将来はガードにしたいといつも思っていた。そこで、ミスは多いものの、チャンスがあればたとえ一分であっても公式戦に出すようにしていた。ところが私は、頻発する彼女のファンブルを、入学当初は「経験不足だからだろう」と思っていて、あらゆる手段を用いても改善されないウィークハンドだと気付いていなかった。ウィークハンドとはボール扱いの不安定なことを言う。不器用とは少し違った意味で使う。

瀬尾尚美

訓練を重ねればいい技術を身につけるだろうと思わせるセンスを持っていた。慎子は瀬尾を追い越さなければレギュラー選手にはなれないと思っていたようだ。「強くなりたい」「巧くなりたい」という気持ちの人が一倍強い慎子は、競争相手となる選手の特徴を細かく観察していたのである。瀬尾をライバル視し、瀬尾の特長を細かく調べ上げていた。しかし瀬尾は、前述のごとくこの後四ヶ月ほどブレイを続けたあと辞めた。校風が合わなかったか、私の指導方法が気に入らなかったかのどちらかだろう。

自分自身が教祖となつてすべての選手を自分の考えに従わせ、命令一下選手を自由に動かせるのならチーム創りも簡単だ。しかし多種多様な人間を集め、個人個人が持っている力を、チームの一員として活動することによって引き出してやるうとするならそんなやり方はできっこない。私がもう少し人間的に熟練していたならば瀬尾ともうまくやっていったのかも知れないが、当時の私にはまだその力はなかった。過去にもこのようなケースで何人がが去っていった。それにまた、新たな犠牲者として瀬尾が加わった。

肘井 茜

リクルートのエピソードのところでも述べたように、入学当初の彼女のドリブルと、パスと、ディフェンスと、走るフォームはこのままではまず試合には出せないというほどひどかった。バスケットボールの経験がない普通の子をゼロから教えるよりもまだ手がかかるほど、我流でやってきたクセがついていた。ただ、バネがすごいということと、フォームはでたためでもシュートに向かう時の集中力がずばらしいということが唯一の救いだった。

ほかには何もできないことがない。しかしシュートに向かう集中力だけでチームを救ってくれたのが平成六年の県高校総体である。肘井は不動金縛りにかかった寺平の代役で後半出場して八得点を挙げ、渡りの途中に佐渡島あたりで不時着しそうな鶴鳴を、再び天空に舞い上がらせて無事に本土まで飛ばせてくれた。それにしても、「それだけしかできないからダメだ」というケースは多いが、「それだけしかできない」ということが、これほど大きな力を生むということを実証したという点において、鶴鳴の歴史上肘井の右に出る者はいない。私のアタマに「なるほど」という文字を刻んでくれた選手の一人である。

## 二 モツブ係

慎子はチームで一番の暴れん坊であった。「強くなりたい」「巧くなりたい」という気持ちが一層強い。しかし、それが強すぎて自分しか見えない。すごいパスを通すがコントロール不足で味方が取れない。奪えそうもないボールを強引に取りに行つてファウルする。そんなことの連続である。「おまえ一人のためにやってんじゃないよ!」と、私から言われる毎日が続いていた。そんなわけで、メンバー表に名前は連ねるものの大事な試合での出番はないという試合が多かった。

慎子の最初の試練は六月の高校総体(前章 八 金縛り)だった。この試合、慎子はメンバー表から外されて補助役員に回された。そのひとつ前の県下春季選手権大会(前章 六 温存)。これは新入生にとつては入学後初めての公式戦である。春季選手権大会の試合結果と個人の詳細については前章で述べたが、前章では決勝戦の出場時間がゼロの選手は記載していないので、ここでその選手も含めてエントリー全選手を再掲し、もう一度解説を加えよう。決勝戦の出場時間がゼロだから、前章では慎子の名前は出ていないが、ちゃんと十五名のエントリーの中には入っている。

#氏	名	学	年	身	長	出身	中学校	準決時間	得点	決勝時間	得点	備	考
工藤	洋子	三年生	一六七	茨城県伊奈東	二四分	十七	四〇分	十九	スタメン				
寺平	博美	三年生	一七四	長崎市長崎	二六分	二	三八分	六	スタメン				
櫻田	綾香	二年生	一六四	佐世保市中里	二七分	十一	三八分	七	スタメン				
野添真優美	二年生	一六六	長崎市横尾	二九分	三	三八分	六	スタメン					
武藤 陽子	二年生	一五五	茨城県伊奈東	二分	二	一分	〇						
野原亜紀子	二年生	一七五	福江市福江	〇分	〇	〇分	〇						
本田伊久代	二年生	一七〇	佐世保市日宇	三分	〇	〇分	〇						
工藤 雅子	一年生	一六〇	茨城県伊奈東	三〇分	六	三九分	二	スタメン					
浜本左也香	一年生	一七五	長崎市緑ヶ丘	十二分	六	二分	〇						
大滝まゆみ	一年生	一六九	茨城県伊奈東	十一分	三	二分	〇						
肘井 茜	一年生	一七五	千葉県栄	一〇分	八	〇分	〇						
瀬尾 尚美	一年生	一六六	千葉県栄	十一分	三	二分	〇						
大野 慎子	一年生	一六〇	佐世保市中里	十二分	二	〇分	〇						
岡 葵紀	一年生	一六六	佐世保市愛宕	三分	〇	〇分	〇						

新入生にとって最初の公式戦であるこの試合、私はいつも新入生を優先にする。もう改良の余地が少ない三年生は、最大のイベントである高校総体までの残り一ヶ月半で、新たな長所が発見されたり飛躍的に伸びたりすることが考えられないからだ。だからこの試合には、三年生の二井麻由子と宇佐美昭代はエントリーしていない。しかし、この二人は次の高校総体では必ずエントリーされる。それは、高校総体が高校生のスポーツ選手にとって一世一代の大イベントだからである。この大会だけは学校側も特別扱いとし、大会前には全校生徒が体育館に集まって選手推戴式が行われる。また、大会期間中は授業を休みにし、全校生徒が各会場に応援に出かける。三年間、共に過ごしたクラスメイトが見守る中で、三年生の選手をセーラー服姿で立たせておくのは忍びない。だからこの時だけは、チーム力がダウンしない限り、戦力としてはあまり期待できない三年生にもユニフォームを着せるのである。

しかも、競技規則により、春季選手権大会はエントリーが十五名だが高校総体は十二名に減る。だから、高校総体は春季選手権大会のエントリーから五名の選手を落とし、その替わりに二井と宇佐美を入れなければならない。落とされたのは二年生から野原と本田の二人、一年生からは慎子と岡と池田の三人であった。

この頃の私は、「小さい選手だけでもやっていけるモーションオフENSEを…」と口では唱えながら、やっぱりサイズのが気にかかっていたのだろうと思う。この時点でも、そしてその後もずっと浜本をアウトサイドで使いたいとこだわり続けているし、慎子よりも大きい瀬尾をエントリーに残している。今、過去を振り返りながら考えてみると、ものすごいファイトと同居しているものすごい危険性のために、慎子は私の視野にあまり入らなかったが、浜本のウィークハンドや肘井の技術の貧弱さの方がもっと危険だったと思う。

というわけで慎子は、高校生になって初めてのビッグイベントには、セーラー服を着てモップ係として運営の手伝いをする方に回った。人一倍「強くなりたい」「巧くなりたい」という気持ちが強い慎子にとって、これは屈辱的な出来事だっただろう。この当時、同じような境遇にあった武藤には、このような屈辱を味わわせないように気を配っていたものの、慎子にはそんな気配りは毛ほどもしていない。慎子が県内の選手ではなく、武藤のように遠方から志願してきた選手だったらエントリーに残っていただろうし、私がサイズを気にせず、機動力を優先に考えていたならば慎子はもっと早く脚光を浴びただろうと思う。不運な選手だった。

一九九九年二月二三日。 雅子がエバンスビルからの帰りの飛行機の中で私にしみじみと語った。

「リザはほんとにいつも、ここが勝負っていう大事なプレイには必ず絡んでましたよねえ」

「そうだったなあ」

「先生覚えていますか？ リザ、最初の高校総体、モップ係だったんですよ」

「エッ」

私は、入学当初の慎子について、とにかく元気はあるが危なくて使えない選手だったということをよく覚えている。が、高校総体のエントリーから外したという「こと」をはっきりとは覚えていなかった。実は、前述の記述も雅子との会話によって埋もれていた記憶を呼び起こして書いたものである。当時を思い出して、雅子はさらに続けて慎子との思い出を語ってくれた。入学してすぐに大の仲良しになった雅子にその頃、慎子は口癖のように自分の思いを洩らしている。

「私、ひよっとしたらレギュラーになれないかも知れない…。でもがんばる。とにかくがんばる」  
そしてずっと後になって、不動のスタメンになった慎子は雅子に次のような述懐をしている。

「私、セン（瀬尾のニックネーム）が辞めたからチャンスをもたらされたけど、センがやめなかつたらどう

なっていたんだろう?」

私は、飛行機の中で雅子の思い出話を聞きながら、「そうかあ」と言ったものの、こちらから何かとばをつなげば涙が出そうだったので、それっきり何も言わなかった。私の思いがちょっと違う角度を向いていたために、将来鶴鳴バスケットにもっとも重要な存在になる選手を足踏みさせ、チームでもっとも向上心の強い選手に、もっとも屈辱的なことを押しつけていたのである。

### 三 元気印

さて、鶴鳴のユニフォームを着てから半年余り、このように、私にあまり注目もされないし気を配ってもらうこともなかった慎子だったが、私が書いた文章の中に初めてその名が登場する時がやってきた。それは永田への挑戦が失敗に終わり、工藤洋子から櫻田綾香へとバトンタッチされて代が替わった最初の試合。長崎地区新人戦だった。

平成六年一〇月二四日付 長崎地区新人戦結果報告

【試合結果】準決勝戦 鶴鳴七五(前四七・後二八)ー(前二八・後二五)五三長崎商業

決勝戦 鶴鳴六九(前三六・後三三)ー(前二一・後二〇)四一純心

#氏	名	学年	身長	出身中学校	準決時間	準決点	決勝時間	決勝点	備考
	櫻田	綾香	二年	一六四	佐世保中里	二〇分	四	二五分	〇 スタメン
	野添	真優美	二年	一六八	長崎市横尾	二〇分	四	二一分	二
	武藤	陽子	二年	一五五	茨城伊奈東	二〇分	七	十五分	〇
	野原	亜紀子	二年	一七四	五島福江	二〇分	四	一〇分	四
	工藤	雅子	一年	一六〇	茨城伊奈東	二〇分	十一	二七分	十三 スタメン
	浜本	左也香	一年	一七五	長崎市緑丘	二七分	一〇	三七分	一〇 スタメン
	肘井	茜	一年	一七五	千葉県 栄	三三分	二四	三三分	二三 スタメン
	大滝	まゆみ	一年	一六九	茨城伊奈東	二〇分	八	十九分	十三 スタメン
	大野	慎子	一年	一六〇	佐世保中里	二〇分	三	十三分	四

#### 【試合感想】

浜本と肘井を中心に練習してきましたのでそのことから報告します。

まず肘井。彼女は長足の進歩といつてよいでしょう。まだディフェンスに素人っぽさが残っています。がそんなことはすぐに解決できます。何よりもいいのがシュートを打つ意欲です。まだ確率は高くありませんが、シュートは意欲と集中力です。これさえあればあとは回数を重ねさえすれば済むことです。

次に浜本。彼女の読みと対応力と場面選択的的確さは、ガードをさせられるほどのものを持っています。しかしそれが試合では充分発揮されません。それは、彼女のポディバランスの不安定さとウィークハンドが原因です。それは本人も承知しています。それを克服するのは苦しいし、わずかの時間では解決できないことも知っています。その時間を短縮してやるのが私の仕事です。

大滝と野添は公式戦になると力が半減します。ふたりとも性格上の問題です。これも本人たちは充分わかっています。これから自己との闘いに挑戦する日々が続くでしょう。もっとも、野添は純心戦の試合ぶりからすると解決する日が遠くないような気がします。

大野のボール奪取に対する執着心はしばしばチームにカッを入れてくれます。ゲームの流れを変えるには貴重な存在です。

武藤が一皮むけたようです。人間がおとなに近づいたのでしょう。これはチームにとって重要なこと

です。なぜなら、櫻田にかかる負担が軽くなるからです。

さてその櫻田は、シュートに安定性がありません。というより打つ本数が少ないのです。それは櫻田が勝負の怖さがチームの誰よりもわかる選手だからなのだと思います。「もっといいチャンスを作るう」と思っただけ過ぎてしまうのでしよう。本当のリードマンや本当のシューターというのは勝負の怖さがわかった上で尚かつシュートチャンス逃さず打てる選手なのですが。

一〇月十九日から練習メニューが大幅に変わりました。練習時間三時間のうちの半分がシューティングです。三〇分のシューティングを三セット取り入れます。理由はシュートセレクションは正しいのですがシュートの確率が悪いからです。私は退屈です。何もしないでじっと見ているだけです。でもほかのことがすべてうまくいっても、最後のシュートが決まらなければ何もできないのと同じですから我慢しなければなりません。

試合中に「あ、ディフェンスが変わった」と、監督の私が言うのを聞いた人がいたかも知れません。ディフェンスのチェンジングはすべてキャプテンの櫻田の判断でやらせました。もし、コートの中の選手にそれがわかるならばコートサイドに立っている私よりもコートの中にいる選手の判断でやらせた方がいいと思っただけです。この試みは実験中です。

入学以来、試合に出してもらっても一分とか二分。しかも、大事な勝負がかかった試合はほとんど〇分。それなのに慎子は、九州高校総体（前章 九 八四日）で二〇分も試合に出させてもらっている。それは試合展開がオールコートのトランジッションゲームになったからだ。だから、慎子のデビューはそこから始まってよかった。私の頭の中を浜本と肘井を起用したオフェンスシステムが占領していたものだから、九州大会で単発に起用されただけで、次の選抜予選では前半一分後半三分の計四分しか出してもらっていない。こうして当時を回想しながら書いていると、慎子のこと以外でも、私が何かにかたわりすぎていたために、気付かずに過ぎてしまったことや、選手を足踏みさせてしまったことがあるのではないかと思っただけで恐ろしくなる。

#### 四 駅伝

相変わらずサイズを気にして浜本と肘井にこだわり続けているものの、慎子のファイティングが私の視野に入ってきたのである。前述のように慎子の名前は遂に活字になった。ファイティングことばが出てきたのでここでファイティングにまつわる話を少ししよう。

『続・チームを創る』を読まれた方はご存知だと思うが、鶴鳴のバスケット部は、一九九〇年に陸上部の宣伝のために駅伝大会に出場した。それ以来、毎年駅伝大会には陸上部の助っ人出場している。しかし助っ人といっても、人数もタイムもまだバスケット部の方が陸上部を上回っている。その駅伝大会の基礎資料となるのが五千メートルタイムトライアルの記録である。その記録表に櫻田・雅子・大滝・慎子のものでないファイティングが刻み込まれている。

基準がよくわからない読者のために解説すると、一応、高校女子のスポーツ選手で五千メートルが速いと言えるのは二〇分台のタイムである。二〇分を切る選手になると駅伝の選手として期待されるタイムだ。そのような基準で新入生の大滝と雅子と慎子を見ると、この半年間で長足の進歩を遂げているのがわかる。読者に特に注目していただきたいのが十一月二日の新入生三人と櫻田のタイムである。これは駅伝大会直前の最終タイムトライアルのタイムだ。四人のタイムから想像しても如何に激しいデッドヒートが繰り広げられたかがわかるだろう。

私は今でもはつきり覚えているがこれは本当にすごいレースだった。いつもは私がペースメーカーに

5000メートルタイムトライアル結果(200メートルトラック25周)

年	月	日	監督	工姉	櫻田	野添	武藤	野原	本田	工妹	浜本	肘井	大滝	大野	
94	4	4	21.16	22.21	22.03	25.22	24.21	23.06	23.01	24.16	24.55	24.35	24.06	24.31	
94	4	5	21.18	22.19	22.08	25.42	24.40	23.33	23.33	25.18	26.33	25.18	25.03	25.31	
94	4	11			21.39	23.58	23.16	22.30	22.35	22.37	24.20	23.31	22.33	22.37	
94	5	9	20.25		20.59	23.20	22.45	22.06	22.28	21.57	23.25	23.09	23.14	22.53	
94	5	23	20.18	21.37	21.13	22.17		21.35	21.44	21.28	22.47	22.48	21.47	22.02	
94	6	27	20.57	24.47	21.10	23.39	23.08	22.10	22.45	20.12	23.08	22.59	21.19	22.50	
94	7	8		21.55	21.09	23.14	23.10	22.55	22.32	21.09	22.57	23.31	21.53	22.00	
94	7	18	20.30	22.17	20.29		22.53	22.41	24.04	20.43	23.22	23.27	22.57		
94	7	21	20.47	22.42	20.37		23.56	23.42		20.38	23.57	23.11	22.14	23.13	
94	7	22	20.55	24.27	21.03		24.35	24.07		21.03	23.27	23.13	24.14	24.02	
94	7	25			21.13		23.49	22.45	23.07	21.15	23.25	23.24	23.10	22.13	
94	8	1		21.44				22.40	23.11	20.51	22.49	23.36	22.27	21.34	
94	8	4	22.53	22.51				22.54	22.54	21.53	22.54	23.10	22.48		
94	9	12	20.01		20.26	21.56	22.48	20.49	21.28	20.01	21.58	22.01	20.39	20.51	
94	9	16	19.54		19.26	21.53	22.17	20.23	21.39	19.26	21.19	21.42	20.01	20.19	
94	9	19	19.56		19.50	21.44	22.06	20.06	22.02	19.35	21.07	21.13	20.57	20.37	
94	9	26	19.58		19.46	22.19	22.30	21.09	21.17	19.56	22.01	21.19	20.08	20.28	
94	9	30	19.55		19.38	22.25	22.11	20.40	21.23	20.00	21.39	21.16	20.00	20.03	
94	10	3	19.51		19.40	22.12	21.45	21.06	21.31	19.43	21.45	21.08	19.49	19.49	
94	10	14			19.51	22.45	22.23	21.14	22.48	19.51	23.14	21.29	20.49	20.17	
94	10	17	20.26		21.00	22.21	20.27	21.10		21.30	22.11				
94	10	24	19.58		21.16	21.41	20.18	21.25		21.19					
94	10	28	19.44		19.17	21.18	21.39	19.58	22.00	19.17	20.52		19.30	19.33	
94	10	31			21.16	21.47	20.13	21.24		21.20	21.42				
94	11	2	20.02		19.25	21.25	21.28	20.30	21.31	19.27	20.41	20.48	19.29	19.31	
94	11	7	19.34	20.59		21.44	21.28	19.58	21.25		20.38	22.14			
94	11	11	19.13	20.46	19.36	21.46	21.00	19.56	21.54	19.10	20.46	21.24	19.45	19.20	
94	11	14	19.31	20.32	19.31	21.25		19.57	21.18		20.33	21.30	19.20	19.34	
94	11	25	19.22		19.37	21.00	21.19	20.21	21.02	19.07		21.09	19.07	20.08	
94	11	28			19.55	20.53	21.17	20.36	21.04	19.13	20.06	21.41	19.13	20.10	
94	12	5		20.58	19.29	21.29	21.11		21.32	19.26		21.38	19.17	20.21	
94	12	19		20.46	19.49	21.33	21.51		21.51	19.13	20.55	21.40	19.13		
95	1	20		20.52	20.20	21.49	22.22		21.43	19.53		22.08	19.53		
95	1	30			20.24	21.39	22.24	20.53	21.54	20.14		22.31	20.14		
95	2	6			20.48	21.45	21.54	21.11		20.02		22.41	19.51		
95	4	17	20.16			22.27	22.03	21.27	22.20	20.42			19.46	20.47	
95	5	12	24.17			20.49	22.08	22.47	20.39	21.21	19.58	23.00		19.58	20.28

「あの子たちは行き帰りの車中でも専門的なことを自分たちの方からどんどん質問するんです。話題がバスケットのことになっても『そこまで考えてるのか』と、逆に私がチーム創りの勉強をさせられまして、逆になんて引張っていくレースになるのだが、この日は残り五周で私が振り切られ、あとは四人のサバイバルレース。抜きつ抜かれつで最後の最後まで誰が一着になるのかわからない激しいレースになった。結局、一年間の訓練の差にものを言わせて櫻田が一着でゴールしたが、ゴールした後は櫻田ははじめ四人ともしばらくグラウンドでのたうち回って起きあがれなかった。

五千メートルのタイムトライアルは、鶴鳴のデコボコグラウンドの二〇〇メートルトラックを二五周走るレースだが、本大会は、島原半島の小浜と口之津間を走るロードレースである。だからこの四人は、グラウンドでの最終タイムトライアルをやる以前に本番のコース試走に数回出かけている。私は本番の大会には現地に出かけるが、試走には一度もついて行ったことがない。引率はすべて陸上部監督の林田先生である。もうこれで五回目の駅伝だが、毎回試走と本番の指導を受け持ってきた林田先生が今回初めて私に感想を述べた。

「先生、あの子たちは普通じゃないですよ」

「何が？」

「試走の行き帰りの車中での話題が違います」

「どっぴうぶつに？」

「駅伝の話題にしてもバスケットの話題にしても奥の深さが違うんですよ」

林田先生が言うにはこれまでの選手たちも一生懸命走ってくれた。しかしどうしても林田先生自身に遠慮があった。なぜなら、バスケット部の選手には、自分の競技以外の余分なことに神経を使わせているという思いがあったからだ。だから、「もっと意欲的なレースをして欲しい」とか「呼吸法を変えればまだ記録が伸びるのに」とか、言いたいことがあってもなかなか言えなかった。それが今回のチームにはまったくないのである。

「あの子たちは行き帰りの車中でも専門的なことを自分たちの方からどんどん質問するんです。話題がバスケットのことになっても『そこまで考えてるのか』と、逆に私がチーム創りの勉強をさせられまし

た」と、林田先生は熱っぽく彼女たちのことを語ってくれた。

それまでの選手たちだって、新聞の紙面では、優勝したチームよりも大きく取り上げられるほど一生懸命走ってくれた。いいかげんな気持ちで走った選手は一人もいない。だが、今年の選手の「したい」「なりたいたい」は強烈な印象だったのだろう。ずっとあとになって、慎子がエバンズビル大学に行くことになった時、コーチのキャシーは慎子のことを、「彼女の人間的な完全さが好きです」とコメントしている。それはすでに、この時点で証明されていたのである。そんな選手たちが走るレースだ。期待はずれのレースになるはずがない。

駅伝大会は十一月五日に行われた。陸上部からは長距離陣のエース森が出場し、他の四人は今年もバスケット部からの応援参加である。その四人というのは、櫻田・雅子・大滝・慎子の四人だ。私は、一区を走る陸上部の森を見送った後、ゴール近くでラジオを聞きながらレースを分析していた。一区は出場チーム全校がエースを当ててくるから、十二位というのは大健闘である。しかも六キロを二分台で走れたのだから森選手としては完璧といってもよいレースだ。二区 - 9 - の櫻田は大会直前になって少し風邪を引き、調子を落としていたがそれでも奮闘し、順位をひとつ上げて大滝につないだ。しかし、三区以降になるとトップ争いの放送ばかりで、それ以下はなかなか名前が出てこない。そうになると、これまでのレースを振り返りながら想像するしかない。私は八位か九位になれるばいと思いつながらゴール近くで放送に聞き入っていた。

ラジオは最終走者の走りを紹介している。いよいよ最終区なのだ。やがてトップの選手が見え始めた。常連の吉岐商業がやはりトップである。続いて諫早高校が二位。三位は瓊浦高校だ。このあたりは毎回上位入賞する常連校ばかりで鶴鳴には関係ない。少し遅れて四位のチームがゴールした。三位と四位はかなり離れていたが四位と五位はもっと離れているようだ。なかなか姿が見えない。私は地元新聞社の城氏と駅伝のことやバスケットのことをいろいろ話しながら放送を聞いていたが、放送車もゴールに着いてしまっているから放送車から出される情報は、私が目の前で見ている情報と変わりはない。退屈さを感じながら城氏と話題をつないでいたら、放送車が五位の走者が見えてきたことを告げた。それを聞いて私たちも話を中断し、五位の走者が現れる辺りに目をやった。

ゴール近くから走者を見ると、丁度夕日を背に受けた逆光になっていて、走者の顔がはっきり見えなく同時だった。「えっまさか」続いて「ひょっとしたらあれ工藤さん？」と城氏が言った。じっと目を凝らして見る。髪のはね方、地面をたたきつけるような重い走り、大きく左右に揺れる肩、どう見ても陸上競技専門の選手の走り方ではない。間違いなく雅子だ。

私と城氏はすつとんでゴールテープ側の歩道に移り、声援を送った。「ハル(雅子のニックネーム)！ ナイスファイト！」。しかし、それ以上のことばが出ない。ありきたりのことばでは軽すぎるようで何

クレインズ 県下高校駅伝大会結果年次推移表

年度	1区	6000	2区	4097.5	3区	3000	4区	3000	5区	5000
1990	松尾 朋子/バスケット	22.29 区間 8位	藤原 由理/バスケット	16.14 区間 9位	川原 涼子/バスケット	11.21 区間 7位	浜口 典子/バスケット	11.42 区間 10位	池田 千代/バスケット	20.10 区間 15位
1991	松尾 朋子/バスケット	22.17 区間 8位	山口美由紀/バスケット	15.16 区間 7位	浜口 典子/バスケット	11.41 区間 16位	一瀬由貴子/バスケット	11.25 区間 5位	川原 涼子/バスケット	20.11 区間 15位
1992	山口美由紀/バスケット	22.46 区間 15位	野本 裕子 陸上	14.52 区間 6位	森 沙弥香 陸上	11.17 区間 8位	池田 紫乃 陸上	11.59 区間 13位	三浦 由美/バスケット	19.36 区間 12位
1993	野本 裕子 陸上	23.12 区間 15位	神崎 景子/バスケット	14.14 区間 3位	池田 紫乃 陸上	11.23 区間 7位	工藤 洋子/バスケット	11.35 区間 8位	森 沙弥香 陸上	19.37 区間 12位
1994	森 沙弥香 陸上	22.46 区間 12位	櫻田 綾香/バスケット	16.11 区間 11位	大滝まゆみ/バスケット	11.06 区間 5位	大野 慎子/バスケット	11.12 区間 5位	工藤 雅子/バスケット	18.53 区間 6位
1995	大滝まゆみ/バスケット	23.30 区間 22位	大野 慎子/バスケット	16.23 区間 16位	櫻田 綾香/バスケット	11.44 区間 17位	大久保光子 陸上	11.52 区間 16位	工藤 雅子/バスケット	19.08 区間 9位
1996	大滝まゆみ/バスケット	23.14 区間 20位	大野 慎子/バスケット	15.20 区間 6位	岡 葵紀/バスケット	11.48 区間 11位	大久保光子 陸上	12.30 区間 14位	工藤 雅子/バスケット	19.54 区間 8位
1997	高橋 彩/バスケット	23.34 区間 20位	平野 未希/バスケット	15.52 区間 13位	山口 友美/バスケット	11.51 区間 12位	森崎 絵梨/バスケット	12.11 区間 13位	齊藤 千夏/バスケット	20.11 区間 13位
1998	高島 淳子/バスケット	23.23 区間 14位	飯笹明日香/バスケット	15.25 区間 9位	成井 千夏/バスケット	11.43 区間 7位	野田 仁美/バスケット	1.43 区間 7位	高橋 彩/バスケット	20.26 区間 6位

と言っているのかわからないのだ。ゴールした後、道端に突っ伏して喘いでいる雅子を見ながら私は何をしてもできず、ただうろろするだけだった。雅子の走る姿や表情から、残りの四人がどんな思いでタスキをつないできたかを想像するのは容易だった。

私の脳裏には四人が、こんな走りで、こんな表情で、こんな気持ちでそれぞれタスキを渡していったのだろうという想像上の映像と、グラウンドで四人がなだれ込んでゴールした映像とがダブッて映し出されていた。後に「風」と呼ばれたクレインズバスケットの魂はこうして着々と磨かれていたのである。

## 五 貧血

しかし慎子は、その後のグラウンドトレーニングではタイムが下がる一方だった。表を見ればおわかりのように、十二月五日に記録をとったあとは四月十七日に再び走るまで、グラウンドトレーニングは休養している。グラウンドトレーニングだけでなく、体育館でのハードメニューもおあずけだ。駅伝大会以後タイムが下がるので血液検査を受けさせたところ、貧血だったのである。

こうして慎子は私の視野に入り、充分その存在価値を認めさせたものの、今度は貧血で戦線離脱。不運な選手である。だが、私も慎子の力と人間性を充分認めたものの、次の試合結果報告に示すように、浜本と肘井のふたりを同時にコートに置こうとして相変わらずやっつきになっているのである。思い込みというのは恐ろしいもので、あとでこうして振り返ってみると「どうしてそこまでだわるの?」「たったそれっぽっちのことに気が付くまでそんなに時間がかかるの?」と言いたくなるような出来事が次から次と掘り起こされてくる。

平成六年十一月二二日付 県下高校新人戦結果報告

【試合結果】 決勝戦 鶴鳴六一（前三二・後二九）ー（前八・後二六）三四純心

#氏	名	学年	身長	出身中学校	出場時間	得点	備考
	櫻田	綾香	二年	一六四	佐世保中里	二五分	九 スタメン
	野添	真優美	二年	一六八	長崎市横尾	九分	〇
	武藤	陽子	二年	一五五	茨城伊奈東	九分	四
	野原	亜紀子	二年	一七四	五島福江	九分	〇
	本田	伊久代	二年	一七〇	佐世保日宇	七分	四
	工藤	雅子	一年	一六〇	茨城伊奈東	三分	九 スタメン
	浜本	左也香	一年	一七五	長崎市緑丘	三分	六 スタメン
	肘井	茜	一年	一七五	千葉県栄	三分	十九 スタメン
	大滝	まゆみ	一年	一六九	茨城伊奈東	二分	一〇 スタメン
	大野	慎子	一年	一六〇	佐世保中里	十五分	〇

【試合感想】

嬉しかったことがあります。

それは、ステージで見ていた協会の役員T氏から、「浜本が強くなりましたねえ」と言われたからです。浜本のウィークハンドと、ボディバランスの不安定さについては再三述べてきました。だから、本人も努力しましたし、私も浜本のそれを解消するために、わざわざメニューを組み替えてたりして練習してきました。しかし、目に見えて上達したという感じはなかなかつかめません。「まだまだ時間がかかるのかなあ」と思いながら臨んだ大会でしたが、そんなことを深くは知らない第三者から、こんな感想を言われたんです。こんなに嬉しいことはありません。また勇気が湧いてきました。

選手たちはよくがんばります。手を抜いたり気を抜いたりする選手はひとりもいません。しかし、どの試合も途中でパツタリ動きと得点が止まる時間帯があります。若さとかキャリア不足だからと言ってしまえばそれまでですが、こんなになんかがんばる選手たちだからこそ、来年と言わずに今年なんかかしたいのです。ムチを入れさえすれば走るようになるのなら簡単ですが、壊さないように甘くならないようにという手綱さばきが実に難しいです。

訓練というのは、「これをやったら一気に変わりました」という答えが出るようなものではありません。油断なく細かいことに気を配りながら、毎日コツコツ積み上げていって始めて成果が現れるものです。次の試合は年が明けた一月中旬です。その試合では、また誰かに「あいつが変わりましたねえ」と言ってもらえるような試合をしたいと思います。

#### 【選手へのメッセージ】

準々決勝佐世保商業戦、準決勝の島原戦、決勝の純心戦、すべて共通している部分があるでしょう。言われなくてもわかっているとおりに、必ずパツタリ動きが止まってしまつ時間帯がありますね。駅伝であれほどがんばる君たちだから、スタミナ不足が原因ではないはずですよ。なぜでしょう？それを解決できた時、はじめて全国大会や九州大会のことを口に出せるようになるのです。これが残っている間はせいぜい県大会止まりですよ。

#### 六 ドラウト

平成七年一月十六日付 九州高校春季選手権大会長崎県二次予選会結果報告

#### 【試合結果】決勝戦 鶴鳴六七（前四〇・後二七）ー（前一九・後十八）三七純心

#氏	名	学年	身長	出身中学校	出場時間	得点	備考
	櫻田	綾香	二年	一六四	佐世保中里	三四分	十二 スタメン
	野添	真優美	二年	一六八	長崎市横尾	二四分	一〇
	武藤	陽子	二年	一五五	茨城伊奈東	三分	〇
	野原	亜紀子	二年	一七四	五島福江	二六分	二 スタメン
	本田	伊久代	二年	一七〇	佐世保日宇	十二分	一
	工藤	雅子	一年	一六〇	茨城伊奈東	三一分	十二 スタメン
	浜本	左也香	一年	一七五	長崎市緑丘	〇分	〇
	肘井	茜	一年	一七五	千葉県栄	三七分	十五 スタメン
	大滝	まゆみ	一年	一六九	茨城伊奈東	二一分	十二 スタメン
	大野	慎子	一年	一六〇	佐世保中里	十二分	三

#### 【試合感想】

現在の本当のスタメンは次の五人です。

櫻田	綾香	二年	一六四	佐世保中里
工藤	雅子	一年	一六〇	茨城伊奈東
浜本	左也香	一年	一七五	長崎市緑丘
肘井	茜	一年	一七五	千葉県栄
大滝	まゆみ	一年	一六九	茨城伊奈東

そのうち、浜本は疲労骨折のために完全休養で出場していません。工藤は冬休みに捻挫して三週間休み、復帰して三日目の試合。肘井は風邪で三日間休み、登校して三日目の試合。大滝は試合直前にイン

フルエンザにかかって大会初日まで学校を休み、二日目にかこうにか会場に姿を現してふらふらしながら試合に出してもらったという状態。

スタメンのセンター陣が全滅なのに、バックアップセンターの野原（二年 一七五 福江中）は冬休みに入る前の体育の授業中にケガをして二週間の休養。しかも冬休みに入ったとたんに捻挫でまた休むという状態。チーム一番の元気印大野慎子は貧血の治療中でちょこちょこ休ませながらの起用。

結局、ローテーションに加えられる選手で心身ともに充実してコートに立てたのは、櫻田・野添・武藤・本田の四人だけです。本場の強さとは、熱心に練習して体力をつけたり技術を磨いただけで身に付くものではありません。ケガや病気、さまざまトラブルやスランプなど、身にふりかかってくるストレスを未然に防ぎ、またそれを振り払う力を身につけなければなりません。

しかし、これはこどもにはできません。今回の試合のように、みんなに迷惑をかけるような経験をして初めて事の重大さに気付き、少しおとなになってようやく気付くようになるのです。選手たちは、手を抜いたり気を抜いたりしているつもりはないのですが、本当にわかるまでにはまだまだ時間がかかります。

#### 【選手へのメッセージ】

後半残り十四分から一〇分間の空白はなんですか。いつものパターンですか。まだこんな問題を抱えてもたもたしてるんですか。どうも、ぶざまさとかふがいなさに鈍感なようですね。勝負に挑む人間というのは、他の人間と違って感覚が鋭敏でなければなりません。もういちど、自分は勝負に挑む人間としてふさわしいかどうか見直してみませんか。もしふさわしくないのなら、早めに道を変えた方がいいですよ。私は、見に来てくれた人たちが退屈になるような試合は絶対にしたくありませんからね。

ドラウト（DROUGHT）とは、直訳すれば干ばつとか日照り続きのことである。バスケットの試合では得点が止まったまま時間が過ぎる状態のことをいう。何分間得点が停滞したらドラウトというのか、何ゴール連続失敗したらドラウトというのかという定義がはっきりしている文献を、私はまだ探し出すことができないが、この試合のように一〇分間も得点が止まった状態が続けば立派なドラウトと言えるだろう。

ある選手の勇気がチームメートの勇気を呼び、その勇気が他の選手の遠慮を誘う。ある選手の怯えがチーム全体に伝染し、その怯えがある選手を発憤させる。ある選手の乱暴なプレイがチームのリズムの乱れの要因となり、その乱暴が膠着状態を抜け出す原動力となる。それがチームスポーツである。私はドラウトに陥ったら、というより陥りそうな兆候が見えたら、オフェンスはスマートなプレイよりもパワフルなプレイを、ディフェンスは守るよりもボールを奪うことを狙えと選手には言っている。そんな時はセオリーを大事にするよりも、心の中のもやもやを吐き出した方が解決が早いと思うからである。

若い頃は、ドラウト（当時はこのような用語は知らなかったが）に陥るのは精神状態が悪いが、またはプレイの選択が悪いと決めつけ、ひたすら選手を罵倒するかカツを入れることに専念していた。ところが、精神的に質の高いチームでもドラウトは起こるし、強いチームにも起こる。いやむしろ、精神的に質が高いからこそ意識過剰になってドラウトに陥る場合がある。このようなことに注目し始めていた私は、この頃さかんにドラウトに関する文献を漁っている。ところがドラウトは、人間の奥深い心理に関わる問題が絡んでいるため、「こうすればドラウトは抜け出せるよ」というはっきりした答えを出せないまま現在（一九九九年）に至っている。

ともあれ、選手にはそれを意識させる必要があると感じたのでこの頃からスクリメージ・練習試合・公式試合の全てにおいて五分単位の得点経過を出し、選手に意識させることを試みた。特に、通常の練習の中で行うスクリメージや練習試合は、コート中央に大きな移動用黒板を出し、それに五分単位の得

点を書いていく。選手はそれを意識しながら五分間で八点未満の時間帯を作らないように努力するのである。この方法はその後ずっと続けているが、試合の流れや相手との優劣を常に意識して試合ができるようになるだけでなく、それはドラウトから抜け出すというよりドラウトの予防としておおいに役立つ方法ではないかと思っただけでも続けている。

## 七 筋力トレーニング

平成七年二月十三日付 九州高校春季選手権大会結果報告

【試合結果】決勝戦 中村学園九四（前四六・後四八）ー（前二六・後二〇）四六鶴鳴

#氏	名	学年	身長	出身中学校	出場時間	得点	備考
	櫻田	綾香	二年	一六四	佐世保中里	三五分	三 スタメン
	野添	真優美	二年	一六八	長崎市横尾	三分	〇
	武藤	陽子	二年	一五五	茨城伊奈東	一分	〇
	野原	亜紀子	二年	一七四	五島福江	四分	〇
	工藤	雅子	一年	一六〇	茨城伊奈東	三五分	七 スタメン
	浜本	左也香	一年	一七五	長崎市緑丘	二七分	五 スタメン
	肘井	茜	一年	一七五	千葉県 栄	四〇分	二一 スタメン
	大滝	まゆみ	一年	一六九	茨城伊奈東	三六分	八 スタメン
	大野	慎子	一年	一六〇	佐世保中里	十九分	二

### 【試合感想】

今年の九州各県のチームの力関係は、中村・小林・鶴鳴・豊見城南が四強だろうと思っていましたが予想がはずれました。中村学園が一強で、次に鶴鳴・小林・九州女学院・豊見城南が団子レースで追いかけている状態でした。あとははるか彼方からついてきています。鶴鳴や小林には人がいたことや九州女学院は全員一年生だということを考えると夏はどうなるかわかりません。

さて、鶴鳴ですが…

まず浜本のことから報告します。経過観察のために二月八日にエックス線撮影をしました。完全休養開始から四〇日目です。その結果、浜本の頸骨には肥厚した部分がくつきりと映っていました。あと一ヶ月の完全休養が必要です。でも、今回の試合には出しました。一回の試合で悪くなることはありません。悪いのは痛いのに継続して練習をすることです。

しかし、四〇日も休んだ後のぶつつけ本番です。私は不安でした。毎試合チームメートの足を引っ張るプレイをして、交替させられるハメになるのではないかと思っただけでハラハラしていました。ところがコート上の浜本の顔に不安の影は微塵もありません。遠慮するでもなく、やりすぎるでもなく、淡々と自分の役割を果たしています。私は感心しました。これだけでも今大会の収穫は充分あったと思います。しかも浜本は、全試合スタメンの出場です。出場時間が短いのは、私が気遣って早め早めに交替させたからであって、決してプレイ上で不安があったからではありません。

決勝戦はまるでこども扱いされました。これなら決勝に出なければよかったと思いたくなるような試合でした。でも、それが現実ですからしっかり受け止めて次のステップを目指さなければなりません。恥ずかしかつたという思いは私だけでなく、選手も同じだったはずですから。

【選手へのメッセージ】ー一回戦（豊見城南）ー

大きなうねりが何度も来た試合でした。溺れかけた選手も何人かいました。しかしどうにかこうにか

生き延びました。これは財産になると思います。

【選手へのメッセージ】ー準決勝（九州女子）ー

やることなすことうまくいかない時は誰にでもあります。でも、訓練した人間というのはそんな場面に遭遇した時に、普通の人間と違うはずですよ。自分でも「よく持ちこたえたなあ」と感じたり、見ている人もまた「よく切り抜けたなあ」と思う。それがスポーツのおもしろさです。この試合にそんな場面がありましたか？。

【選手へのメッセージ】ー決勝戦（中村学園）ー

ほんとに厳しい相手に当たった時に、パスやドリブルではなく、シュートを打とうとする選手がエースですよ。この試合で一番多くシュートを打ったのはエル（肘井）です。このチームはエルがエースですか？エルはまだ覚えなければならぬことがたくさんある選手です。そんなエルに大切な仕事を押しつけて自分は安全地帯で悠々としているのですか？

前借り七人組が一年生として公式試合に出場するのはこれが最後である。次の公式試合は二年生になってからだ。一年生としてのゴールの着順は、工藤・浜本・肘井・大滝、そして慎子。その順位はとうとう変わらなかった。私が浜本へのこだわりから抜けたし、慎子の真価を見抜けるようになるまでにはもう少し時間がかかる。読者にはもう少し辛抱していただく。

さて、この試合以後大きく変わったのが筋力トレーニングである。鶴鳴は確かに巧い。しかし、中村学園のパワーにはまるで子供扱いされた。その結果を見て、私は従来行ってきた筋力トレーニングを大幅に改良することにしたのである。改良するに当たっては、そのために傷害を起こしては怖いので、負荷を軽くしたスピードトレーニングから手を付けることにした。詳しくは第四章で述べる。

## 八らしさ

平成七年四月二十八日付 県下高校春季選手権大会結果報告

【試合結果】決勝戦 鶴鳴四八（前二七・後二一）ー（前十七・後十七）三四純心

#氏	名	学年	身長	出身中学校	出場時間	得点	備考
	櫻田	綾香	三年	一六四	佐世保中里	一三分	六
	野添	真優美	三年	一六八	長崎市横尾	三三分	七 スタメン
	武藤	陽子	三年	一五五	茨城伊奈東	九分	〇
	工藤	雅子	二年	一六〇	茨城伊奈東	三五分	四 スタメン
	浜本	左也香	二年	一七五	長崎市緑丘	九分	〇
	肘井	茜	二年	一七五	千葉県栄	二三分	一〇 スタメン
	大滝	まゆみ	二年	一六九	茨城伊奈東	三六分	一〇 スタメン
	大野	慎子	二年	一六〇	佐世保中里	三二分	十一 スタメン

【試合感想】

現在の鶴鳴の主力選手は、櫻田・野添・武藤・工藤・浜本・肘井・大滝・大野の八人です。その中からスタメンを決めるわけですが、それは対戦相手のメンバー構成次第で変わります。その八人の中で、様子を見ながら使った選手が三人います。それは、三月中旬に捻挫してしばらく休んだ後、再び膝の打撲で約一ヶ月練習をしていない櫻田、疲労骨折は治ったものの、三月下旬の関東遠征最終日に捻挫して、都合三ヶ月練習から離れている浜本、四月十三日の血液検査の結果、ヘモグロビンが九しかなかった肘井の三人です。

そのうち櫻田と浜本は、この春季選手権から徐々に復帰していきますからよくなる一方です。肘井は鉄剤を投与しながら、しばらくは体力を消耗する練習はすべてカットします。おおむね、五月下旬までにヘモグロビン十二まで回復させる計画です。そして、六月上旬の高校総体は全員心身共に快調な状態で試合に臨ませるつもりです。

今回の試合における個々の選手についての感想を述べますと、短時間ではあるが、櫻田がコートにいると落ち着くということを再確認しました。しかし、それよりも私が感心していることは、野添が人間的に大きく成長したことです。すぐカッとなって自分を見失っていた野添が、試合中に取り乱さなくなったのです。最近、鶴鳴が大きく崩れることなく試合が進められるようになったのは、この野添の成長が大きく影響していると思います。

さて、試合についての感想を述べましょう。「純心はなかなか健闘しましたねえ」「意外に点差が開きませんでしたねえ」「鶴鳴、調子が悪かったんですか?」などなど、いろいろ言われましたけど、鶴鳴の調子が特別悪かったわけではありません。今日の試合ぐらいが、今の鶴鳴と純心の力関係を表しているのではないかと私は思っています。十一月や一月の試合は、純心が全国選抜大会の直前直後だったので、新チームとしてのまとまりがなかったはずですから、あの頃の試合ぶりや点差は参考になりません。それならこれからの見通しはどうかということになりますが、それについては、今回の試合を含めて都合四回の試合の得点を整理して検討してみると自ずから答えが出てきます。

一〇月 地区新人 鶴鳴六九一四一純心  
十一月 県下新人 鶴鳴六一一三四純心  
一月 九州二次 鶴鳴六七一三七純心  
四月 県下春季 鶴鳴四八一三四純心

これから言えることは、純心は、今年になってもまだ一試合四〇点以上の得点を取る力についてはいないということです。もしそれが、あと二ヶ月で改善されないのならば、今年の純心は試合をスローペースにして守り合いの試合に持ち込まなければなりません。ということは、こちらはそれに引きずり込まれないようにしなければなりません。そのためには、動きを止めないバスケットにさらに磨きをかけなければなりません。まず、そうして県内の試合をしっかり制してから次のことを考えたいと思います。

#### 追伸

二月下旬から始めた筋力トレーニングが三〇回を越えました。工藤と大野は外見からもたくましくなったのがわかります。

#### 【選手へのメッセージ】

ヘア(櫻田)・ライ(浜本)・エル(肘井)は、これから体調を整えて、六月には快調な状態で試合に臨もう。焦りは禁物。ハル(雅子)は筋力トレーニングを熱心に行ったからポパイの妹みたいな身体になったけど、それに加えて今度は相手を一瞬にして出し抜く技を磨こうよ。私のとっておきの技を教えるから。全体として、三年生には風格が備わり、二年生はたくましくなり、新生生は目付きが鶴鳴らしくなり、これから本当に強くなりそうな気がした。今度の高校総体は観る人を飽きさせない試合ができるようにがんばろう。

二月中旬の九州大会で中村学園にこども扱いされたのをきっかけに、筋力トレーニングを改良してから県下春季選手権大会まで二ヶ月が過ぎ、筋力トレーニングを行った日が三〇回を越えた。さらに、九月以降は、内容を筋力アップに切り替えずと続けて行われることになるが、積み重ねというのはおそろしいもので、それが結局秋の福島国体さらに翌年の山梨インターハイの好成績につながる素になる。

詳しくは第四章で述べるがまさに、「たゆまざる 歩みおそろし かたつむり（北村西望先生の句）」である。しかし誰がやってもそうなるというのではなく、今年の選手たちは、意識が違っていたからそのような成果として現れたのだと思う。普通、いくらトレーニングに熱心だといっても、年頃の女の子が力こぶ比べはしない。腕の太さをできるだけ隠そうとするのが普通だ。しかし彼女たちは互いに力こぶ比べをするほど熱心だった。

もう一つ、この春季選手権での特筆すべき話題は野添真優美である。彼女は、これまで何度も言ってきたようにすぐカットとなって頭が真っ白になるタイプだった。過去、私のコーチングキャリアでこのような選手は大成した記憶がない。こんな選手はいくら訓練してもダメだというタイプの選手はコーチという仕事をしたことのある人なら誰でも、一人や二人思い出すことができるだろう。私の場合、野添みたいな選手タイプの選手は大成しなかった。

野添は私のそんな常識を覆してくれた。というより私のコーチ観を根底から変えてくれた。今こうして情熱を失わずにコーチを続けていられるのは、野添の変身ぶりだが、私に大きな影響を与えたことが原因のひとつであることは間違いない。野添の変身の原因はわからない。私は心の在り方については人一倍選手に話をする。しかしそれが、野添の成長におおいに役に立ったという自信はない。ひとつ考えられるのは、そんな野添を放置せずと使い続けてきたからなのかも知れないと思う。

野添はとんでもないシュートセレクションでシュートを打つ。カットとなってミスをする。が、それでも私は彼女を使い続けていた。期待していたからではない。将来性を見抜いていたわけでもない。メンバー構成が野添を使わざるを得ない状況だったということもあるし、この年の試合は、野添を使わなければならぬ様相の試合が多かったということもある。

というわけで、この頃の私は彼女を変身させようとして意図的に何かを仕掛けたわけではないが結果的に彼女は変身した。彼女は、ともすれば思うように育たない選手に対して、「あいつはだめだ」というレッテルを貼ってしまったいがちな私に、大きな教訓を残してくれたばかりでなく、「根気よく指導すれば人は育つんだ」という勇気を与えてくれたという点で私のコーチ人生における重要な存在になった。

## 九 本番

平成七年六月八日付 県下高校総合体育大会結果報告

【試合結果】決勝戦 鶴鳴五五（前三一・後二四）ー（前二九・後二一）五〇純心

#氏	名	学年	身 長	出身中学校	出場時間	得点	備 考
	櫻田	綾香	三年	一六四	佐世保中里	三五分	十二 スタメン
	野添	真優美	三年	一六八	長崎市横尾	二八分	一〇 スタメン
	武藤	陽子	三年	一五五	茨城伊奈東	二四分	七 スタメン
	工藤	雅子	二年	一六〇	茨城伊奈東	二三分	二
	浜本	左也香	二年	一七五	長崎市緑丘	八分	二
	肘井	茜	二年	一七五	千葉県 栄	三一分	六 スタメン
	大滝	まゆみ	二年	一六九	茨城伊奈東	一六分	六
	大野	慎子	二年	一六〇	佐世保中里	三五分	一〇 スタメン

### 【試合感想】

接戦だったので、試合が終わって長崎に帰る途中のバスの中で「俺、少し動揺したと思うか？」と櫻田に聞いてみました。すると櫻田は、「動揺してないと思います」と答えました。さらに私は、「具体

的な事実を示してそれを証明できるか？」と聞きました。櫻田はしばらく考えていましたが「わかりません」と言いました。私は「どんなにまずい場面になってもタイムアウトを取らなかつたじゃないか。それが具体的な事実だよ」と言いました。

その時の櫻田は、わかっていたけどうまく言えなかつたのか、なんとなく感じたものの、具体的には何もわかっていなかったのか、どちらかわかりません。しかし、はっきりしているのは、自分の思いを具体的に表現できなかったということだと思います。それが実力です。思っていることもできることも、他人にわかりやすく説明することができて、はじめて自分の実力として備わったと言えるのです。櫻田ですらこの有様ですから、他の選手は推して知るべしでしょう。

私が「まずいなあ」と思ったのは、攻撃の手段として、センターとガードの二対二を多用する場面が多かったことです。あれは、「何をやってもうまくいかない時に使え」と教えたつもりなんです。安易に二対二を多用したということは、選手の頭の中では、「うまくいかない時は」という文字が消えて、「二対二は鶴鳴モーシヨンの手段のひとつ」という認識が住み着いてしまっていたのかもしれない。もちろんそれは、今回の試合で突然そうなったのではなく、それまでの練習の段階でその前兆があつたはず。それを早期に発見できなかった私にも責任があります。

このように、櫻田の説明にしても二対二を多用し過ぎたことにしても、選手が「わかつた」「できた」「説明できる」と思っていることの中には、最後に「つもり」ということばをつけ加えなければならぬものがたくさんあるようです。そしてそれは、選手よりもコーチである私が早い時期に発見し、徹底した治療をしなければならぬ重要な事項だと思います。

さて、はじめに戻って、なぜ私が大きな動揺もなく試合が進められたかを説明しましょう。それは野添と武藤の働きぶりによります。武藤が一度むけたことは地区新人戦の報告書で紹介しました。野添の成長ぶりも前回報告しました。今回はこのふたりが初日から実に安定し、堂々とした態度で様々な局面を切り抜けていったのです。私はこのふたりを見ていて、「このふたりがコートにいるかぎり大崩れすることはないな」と思いました。私はこの大会期間中、ずっとこのふたりに注目してきました。彼女たちのちょっとした行動や目つきや態度から、彼女たちの心の中で何が変わったのかを見抜こうとしました。しかし見抜けませんでした。が、変わったのは事実なんです。

加えて説明しておきます。このふたりは過去二年間精神面の問題で私に罵倒された回数が、他の選手より圧倒的に多い選手でした。そのふたりが今回は誰よりも安定した状態で試合をしているのです。不思議でした。感動しました。そして「人は変わり得るんだ。このふたりのように。おまえはそのことを本当に信じて根気強く指導してきたか？」と、今自分の心に問いかけています。

#### 【選手へのメッセージ】

データを見ると、野投も三点シュートも確率は純心に負けてるね。それでなぜ試合に勝てたのかというと、オフエンスリバウンドで優っているからさ。それぐらいリバウンドボールを制するということが重要なことなんだ。それについては「よくがんばった」と評価してやれるよ。でも、リバウンドボールの奪い合いは、あくまでシュートが不成功だった場合の争いであって、本当はリバウンドボール争いが無くて済むようにシュートを決めることが大切なんだ。また、「よく動いている」ことに自己満足していて本当にゴールを狙ってはいないんだろうね。

この試合、慎子はスタメンで登場している。が、それは私が慎子の重要性に気が付いて起用したのでなく、佐世保で行われた試合なので、佐世保出身の選手をできるだけ優先させようという意図で起用したのである。この試合で、慎子がどのようなプレイをしたかというのを、今こうして回想しながら書いていても、思い出すことはできない。覚えているのは、浜本が後半の重要な場面で、速攻からの鮮や

かなジャンプショットを右サイドから決めたプレイである。が、浜本のプレイはこれを最後に私の記憶に残っていない。

この後の浜本は試合毎に出場時間が少なくなり、替わりに慎子の出場時間が増えていった。そして何年経っても鮮やかに蘇ってくる慎子のプレイが、私の頭の中にフイルされていくことになる。今こうして振り返って見ると、最初から浜本を肘井のバックアップとして育て、慎子をアウトサイドのローテーションに組み込んだチーム創りをしていれば、浜本は中継ぎながらも戦力となって息長くプレイできただかもしれないし、もっと早く風軍団が出来上がっていたかも知れないと思う。

思い込みを払拭するまでに一年三ヶ月。もし私が若いコーチだったら途中で忠告してくれる人がいて、もう少し早く抜け出せたかも知れない。しかし年齢的にベテランの域に入ってしまった私には、もし私の間違いに気付いたとしても遠慮して忠告してくれる人はいない。間違い探しや発想の転換はすべて自分でやらなければならないのである。

## 十 デビュー

平成七年六月十四日付 全九州高校総合体育大会結果報告

【試合結果】 決勝戦 中村学園九四（前五〇・後四四）ー（前三六・後四二）七八鶴鳴

#氏	名	学年	身長	出身中学校	出場時間	得点	備考
	櫻田	綾香	三年	一六四	佐世保中里	二九分	十二 スタメン
	野添	真優美	三年	一六八	長崎市横尾	十一分	八 スタメン
	武藤	陽子	三年	一五五	茨城伊奈東	五分	〇
	工藤	雅子	二年	一六〇	茨城伊奈東	四〇分	一〇 スタメン
	浜本	左也香	二年	一七五	長崎市緑丘	十一分	五
	肘井	茜	二年	一七五	千葉県 栄	二九分	十八 スタメン
	大滝	まゆみ	二年	一六九	茨城伊奈東	三七分	十四 スタメン
	大野	慎子	二年	一六〇	佐世保中里	三八分	十一

### 【試合感想】

エントリ選手を注意して見ると、先日行われた県高校総体のメンバーと違うことにお気づきだと思います。これがインターハイになるとまた違ってきます。さらに、国体や全国選抜大会になるとまた違ってきます。それには次のような訳があります。

今の鶴鳴で本当に強い相手と戦う時に絶対外せない選手は八人です。それ以外の選手は、新人に経験を積ませるという意味でエントリする場合があるし、お世話になった上級生にチャンスをまわしてやりたいという意味でエントリする場合もあるからです。

まず九州大会に臨む前の一週間で何をやったかを報告します。

県高校総体が終わってから九州大会までの間にコートで練習できる回数が六回。だから、県高校総体でよくなかったところを治して臨むということはできませんが、今後の課題には県高校総体直後から取り組んでいます。練習は、シューティングと筋力トレーニングとハーフコート五対五だけです。中でもハーフコート五対五は三〇分ずつの三セット、計一時間半もやります。練習時間の半分は五対五なので、安易に二対二を使い過ぎるのを修正するためと、センターとガード・フォワードの動きの優先順位や内容を整理するためです。

次に試合結果を報告をします。

試合終了時のスコアは九四対七八です。しかし私は、八九対八四で終わることができた試合内容だったと思っています。それでも負けは負けですが、もし五点差で終わることができたならば、自分達のランクがどれくらいなのがわかっていない選手たちにとって、大きな自信につながるはずです。試合が終わったあとの私の心の中には、五点差で終われなかったことに対しての「もったいなかった」という気持ちと、十六点の差になったことに対しての「これが力の差なんだよなあ」という気持ちが同居しています。

十六点もの点差になったのは一言でいえば若さです。前半の終わり頃と後半の終わり頃に、ちょっとした判断の誤りでターンオーバー（ミスして相手にボールを奪われること）が出てリズムを崩し、そこでバタバタと点差を開けられました。練習では決して出ることのないような、実にもったいないターンオーバーでした。本当に強いチームと戦う時の緊張感の連続の中での対応力が、まだ身についていないのでしょうか。若さが出た場面はターンオーバーだけでなく、フリースローにも現れました。肘井と大滝が、最後の大事な場面で六本連続落としたのです。肘井は他のことでは未熟な面がまだ残っています。シュートに関しては自信を持っているはずですが、それでもこのようにことごとく落としてしまいました。公式戦のビッグゲームで、しかも勝負を意識し過ぎた緊張感からそう思ったのだと思います。

不運だったのは野添です。前半五分過ぎ、猛烈なダツシュでステールに成功した野添は、相手の選手ともつれて足首を捻挫してしまいました。これは、試合運営にも大きく響きましたが、野添自身にとっても変身した自分を大舞台で初めて披露できるチャンス逃したという意味で大きな事件でした。

試合の展開について少し述べましょう。

私は男子の準決勝戦のハーフトタイムの時、櫻田をつかまえて、「おい、決勝戦は終始オールコートマンツーマンでいくぞ。総力戦だ。みんなに伝えておけ」と言いました。それまでずっといろいろ考えてきたのですが、どんな図を描いても善戦の図すら描けないんです。私が描いた図は、どうしても中村学園のセンターふたりにねじ込まれて手も足も出ない図です。そこで考えたのが、制限区域内でプレーする葛岡と川畑にボールが渡るまでに時間をかける作戦です。オールコートディフェンスをすると抜かれてノーマークシュートに持ち込まれる回数が増えます。しかしそれは、こちらから積極的に仕掛けた結果であって、ゴール下でバンザイをして「どうにもなりません」という点の取られ方をするのに比べれば、精神的なダメージが少なく済みます。この作戦は当たったと思います。選手も私の意図を理解し、精一杯がんばってくれました。そして、「なんとかなるぞ」という思いがオフENSEにも好影響をもたらし、最後の最後まで足を止めないムーヴィングオフENSEを続けることができました。

多くの方々からお誉めのことばをいただきました。「ありがとうございます」と素直に受けたいと思います。試合を観に来てくれた人から、「鶴鳴のバスケットはおもしろいよ」と言われると元気が出てきます。インターハイもがんばります。

#### 【選手へのメッセージ】

ガイとヒロに言っておきたい。君たちは一年生からふたりだけ遠征に参加して、上級生とともに行動させてもらった。そして、中村学園との奮闘ぶりを見せてもらった。あの奮闘ぶりは、一日や二日のわか仕込みではできない。毎日の練習や、宿舍や、更衣室での上級生の態度をよく見ていればわかるだろう。君たちは今回、ベンチに座って見ていただけでもしていない。しかし、その目でしっかり見たものが実に貴重な財産なんだ。大切にしろ。

慎子はこの試合で三分も出場した。そして後半一〇分過ぎに私の目に強く残るプレイをした。それは、中村学園のガードがハイポストの選手にパスを入れた時、慎子がハイポストにヘルプに行くとき見せて、ハイポストの選手からガードに戻るパスを引っ掛けたプレイだった。プレイの内容そのものは、

少し気が利いた選手なら誰でもやるプレイだ。しかし私は、この瞬間に、「こいつは生きるか死ぬかの際どい戦いには絶対欠かすことのできない選手だ」と思った。エバンスビルから二年二ヶ月ぶりに里帰りした慎子に、私はその時のことを聞いてみた。

「おまえ、あの時のプレイ覚えてるか？」

「えー？そんなことありましたかねえ？」

「私はそれよりも、二月の九州大会の準決勝のことをよく覚えているんですよ」

慎子は、入学当初からステイルをよく狙う選手だった。それも時々とか気まぐれではない。一瞬たりとも気を抜くことなく、常に一生懸命狙っているのだ。いつも一生懸命やっている選手は、あまり熱心ではない選手よりも自分の成長に気付かない場合が多い。慎子はとびきり熱心な選手だったので、自分の内面の微妙な変化に気付かなかったのだろう。

慎子は、入って来た時からファイトのかたまりみたいな選手だった。しかしそのファイトは、「危険を省みないファイト」で、おまけに浜本に固執していた私は、慎子のファイトがどう変化していくのか細かく観察をしないままだった。一年経つてもその第一印象は拭えなかった。それが、今回のプレーで一瞬見せた慎子の目つきや筋肉の動きや構えなどから、「失敗した時の危険には充分備えた上にますます磨きがかかったファイト」に変わっているのを私は感じた。慎子は迷懐の中で次のようなことも述べている。

「先生から指摘されたことが気になって乱暴なプレイを抑え、パスばかり回してまた叱られて……そんな繰り返しばかりでしたねえ」

「私は先生の視野の中にまったく入っていないことを知っていました。でもそれをどうすることもできませんでした」

一生懸命やったことが裏目に出る。もがいてももがいても浮かび上がれない。しかし、慎子は百万ドルにも匹敵する財産を持っていた。それは「なんとかしたい」という気持ちである。その、「なんとかしたい」という気持ちが慎子を少しづつ少しづつ浮かび上がらせ、少しづつ少しづつおとなにしていたのである。その変化が今回突然私の目に留まったのだ。しかし、こうして私の視界のど真ん中に飛び込んできたにもかかわらず、慎子は、自分はこの試合で活躍したという感覚を持っていないから、私に信頼されるようになったとは自覚していない。慎子がそう自覚するのは、もっとずっと後になってからである。

私の目に強烈な印象を植え付けた慎子の活躍は、偶然の出来事から起こった。その出来事とは、変身してチームに欠くことのできない存在になっていた野添が、開始五分で捻挫したことだった。そこで替わりに登場したのが慎子である。だから、野添が捻挫しなかったら慎子の出番も少なかったろうし、私の目に留まるのも後に延びただろうと思う。これを契機に浜本は衰退し、回を追う毎に出場時間が少なくなっていく。あれほど強い思い入れをもって育てようとした浜本が失速し、それまではさほど重要視されていなかった慎子が俄然脚光を浴びるようになった。慎子の台頭でチームが強くなるのだから万々歳なのだが、一人の人間の栄華衰勢に直接関わるコーチという仕事は、残酷な仕事だなあとつくづく思う。

## 十一 アクシデント

平成七年八月七日付 インターハイ結果報告

【試合結果】 一回戦 新座総合六一（前二五・後三六）ー（前二〇・後二八）四八鶴鳴

#氏	名	学年	身長	出身中学校	出場時間	得点	備考
	櫻田	綾香	三年	一六四	佐世保中里	三八分	十三 スタメン
	野添	真優美	三年	一六八	長崎市横尾	二四分	二 スタメン
	武藤	陽子	三年	一五五	茨城伊奈東	九分	〇 スタメン
	工藤	雅子	二年	一六〇	茨城伊奈東	二八分	三
	浜本	左也香	二年	一七五	長崎市緑丘	六分	〇
	肘井	茜	二年	一七五	千葉県 栄	三二分	十四 スタメン
	大滝	まゆみ	二年	一六九	茨城伊奈東	三二分	六 スタメン
	大野	慎子	二年	一六〇	佐世保中里	三一分	一〇

### 【試合感想】

バスケットボールの機関誌に掲載された大会前の下馬評は次のとおりです。

が名短と中村

学園、 が甲子園・昭和学院・樟蔭東、 が鶴鳴・湯沢北・聖和・沼津市立。このように、下馬評では鶴鳴は上位一〇チームの中にランクされていました。文章の中にもはっきりと「目が離せないダークホース鶴鳴」と書いてありました。二月の九州大会・春休みの遠征・六月の九州大会などの情報にもとづく資料から割り出したのでしょうか。また、多数の方々から、「磨きがかかってきたらしいですね」「四日から鳥取に乗り込みますからね。がんばってくださいよ」などと、活躍を期待したことをいただきました。もっとも辛いのがこのらの期待を見事に裏切ったことです。

平成二年の夏、仙台インターハイでも一回戦で秋田経法に負けました。この時も今年と同じように前評判が高かったので辛い思いをしました。仙台インターハイの時は、選手の緊張とあがりで思うような試合運びができずに私も腹立たしい思いをしました。今回の試合は選手がふがいなかったのではありません。選手は精一杯がんばってくれました。だから、かわいそうなのと悔しいのとでなかなか私の精神的ダメージが抜けません。

試合を分析してみます。相手の四番にかきまわされました。ブラインドを何回もつかれました。リバウンドボールを取られ過ぎました。しかしこれらのことは勝敗を決定づける要因ではなかったと思います。これらのことはすべて、こちらのオフENSEの乱れから連鎖反应的に起こったことだと私は思っています。オフENSEの乱れの原因の半分以上は相手のディフェンスの執拗なプレッシャーによるものです。残りは自滅です。ブレイの選択の判断が狂ってしまった選手たちはなかなか立ち直りのきつかけがつかめません。だから私はその点については指示を出しました。「この相手は今までの相手よりもあとふたつぐらい多くゆさぶりをかけて攻めるつもりでないと成功しないよ」

選手もそのことはすぐ理解しました。しかし、ブレイの中で現れた現象は、決めに行こうとする選手とボールをもらいに行こうとする選手がかち合ったり、あとひとつ合わせが必要などころなのに誰も合わせに行かなかったりするというリズムの乱れでした。だから、シュートチャンスができて気持ちよくシュートが打てません。そんなペースで最後まで行きました。

鶴鳴のオフENSEは、数種類の基本的な原則だけが決められていて、選手がその場の状況を見ながら適切な動きを選択していくというフリーランスオフENSEです。だから、うまくいく時はすごいのですが、噛み合わなくなるとこのような弱点をさらけ出すと言えるのでしょうか。でもまだ、国体と選抜大会の二回、鶴鳴モーションを見てもらえるチャンスがあります。次はこの問題を処理して鶴鳴らしさを披露したいと思います。すみませんでした。

### 【選手へのメッセージ】

悔しいねえ、実に悔しい。みなさんに鶴鳴らしさのかけらも見てもらえなかったのが実に悔しいよ。

でも、誰が悪いというものでもない。もしかしたらこれが鶴鳴の弱点かなあという事態が、大事なインターハイの舞台で出てしまった。九州大会の結果も鶴鳴の真の姿だし今回の結果もまた鶴鳴の真の姿を表していると言えるのだろう。このあとアメリカ力遠征を経て国体と選抜、あと二回チャンスがある。見事に修正してもう一度みなさんに見てもらおう。

鳥取のインターハイは本当に狙っていた。優勝とか決勝進出は無理としても、ベストエイトにはなんとしてでも食らいつき、調子次第ではベスト四まで進出したいと思っていた。しかし、敵は鳥取ではなく、すでに長崎で私の身边に密かに潜り込んでいた。

明日が出発という日、一人のケガ人もなく無事に練習を終え、出発の準備もすっかり整って選手達を寮まで送り届けた後、突然、個人的なことでトラブルが発生したのである。それは簡単には済まされないうトラブルで、一応の処理をするのに真夜中までかかってしまった。それも、一応処理をしたというだけで解決までには長い期間を要する。

そうしてバタバタしながらも、予定通りの時刻になんとか出発することができ、インターハイには間に合ったものの、初戦の新座総合合戦中に、そのことで私の携帯電話には長崎からしばしば連絡が入った。もし読者の中にその試合を応援していて、私が試合中に携帯電話をかけているのを見た人がいたとしたら、きつと不謹慎だと思われたに違いない。しかし、長崎から電話がかかることはわかっていたので、電源を切ることも、留守電にすることもできず、いつ電話がかかってきてもいい状態にしておかなければならなかったのである。

そんな状態だから、当然私の集中力は阻害される。その時は選手にも誰にも明かさず、通常通りに振る舞っていたが、大事な試合で指揮官の私があるような状態であったとついうのは、一生懸命練習してきた選手たちに申し訳けなかったという思いとして、今でも心の奥底に根強く残っている。